

博士論文の要約

氏 名 木戸 雄一

論文題目 一九〇〇年前後の地方青年における文筆活動の研究
——文章回覧誌を中心に——

本研究は、一九〇〇年前後の地方青年の文筆活動の多様な方向性をとらえることで、その「文学」の領域を明らかにし、さらに彼らを「文学場」への新たな参入者と位置づけることで、それに応答せざるを得なくなった既成の「文学」の変容について分析することを目的とする。

本研究では地方の文章回覧誌に着目する。一九〇〇年代までの地方では、文芸テキストを書くという営みは、文章修行の枠内にあることが多かった。学問が立身出世の要となつて以来、その基盤となる文章の修行は全国的に行われたのであり、各地で文章を書くことを目的とした会や結社が生まれ、活動していた。それらの多くは文章回覧誌を発行し、同人間で文章を評し合っていた。明治中期の文学青年層の活動を分析するために参照されてきた、『穎才新誌』『少年世界』『中学世界』といった広いジャンルの投稿を扱う雑誌や『文庫』『新声』『明星』といった文芸ジャンルとしての「文学」中心の投稿雑誌は、投稿作品の取捨選択や雑誌のジャンル編成によって投稿者が書く文章を大きく規制した。しかし、その規制は青年達の書く行為すべてに及んでいたわけではない。その上、地方では文章回覧誌に参加できる文章能力を持った者は限られており、必然的に文芸愛好者にとどまらない書き手が集まることになった。文章回覧誌には、Literature としての「文学」へと必ずしも向かわない文章もまた多く含まれている。文章回覧誌に掲載された多様なテキスト群を、「文」もしくは「文章」と呼ぶべきであろう。文章回覧誌の研究は、明治期の青年達による文章を書く行為を、文学研究の領域を超えたより広範な言語活動としてとらえ直す契機となる。

中心となる資料は、福島県耶麻郡関柴村で一九〇〇年前後に活動していた「作文会」「文学攻究会」の運営資料と、回覧誌である。従来、特に投稿雑誌の主要な読み手＝書き手とされてきたのは中学生だった。『中学世界』の研究などを通じてそのような階層の分析は進んでいる。しかし、「文学」を読む＝書く地方青年は中学生だけではない。『文庫』のような大きな投稿雑誌を見ても、その中に高等小学校卒や、師範学校、または講義録などで自学する地方青年が多く見出せる。「作文会」「文学攻究会」の会員は高等小学校卒の学歴であり、師範学校への進学を希望する者、役場に勤める者、そして家業の農業に従事する者など、地域に滞留する者が多かった。本研究では、中学校というエリートへつながるコースに乗り、やがて「近代文学」の主要な読み手＝書き手となった階層とは異なる視座から、地方青年の「文学」を検討することで彼らの「文学」の領野をより広くとらえたい。

本研究は二部に分かれている。第一部では、一八九〇年代から一九〇〇年前後の地方の「文学」状況を（１）「文学」の領域（２）知識の商品化（３）垂直と水平の関係性、という三点について分析してきた。

一八九〇年代の地方文学雑誌の文学の領域は文芸・言論・作文の三つの系譜が入り交じっていたが、一九〇〇年代には文芸を他の系譜から切り離そうとする文学雑誌と、三つの系譜を維持する「文学」雑誌が現れた。文芸としての文学と広義の「文学」が領域として重なりつつ区別されていたが、地方の読み手＝書き手の青年達は、時にはそれらにまたがる形で文筆活動を行っていた。

「知識の交換」は地方青年の結社や雑誌の常套的な文句となっていた。このようなスローガンを可能にしたのは、百科全書的な体系化されていない知識が商品化されて多量に供給されたからである。いわゆる「剽窃雑誌」はその役割を果たした代表的な出版メディアであった。

地方に新たに現れた文を書き知識を交換する青年達は、投稿雑誌の中で文章の添削という編集者と読み手＝書き手の垂直の関係と、読み手＝書き手同士の水平の関係を体験した。垂直の関係性は「文学」を個人的な研鑽の営みにする一方、水平の関係性は「文学」を議論や談話の中で生成するものにする。議論を中心にした投稿雑誌は地方に多くの支部を生み、地方での対面を含んだ文筆活動へとつながった。

これらをふまえて、第二部では地方の「文学」青年達の実態に迫るため、文章回覧誌に着目した。文章回覧誌は公刊雑誌に比べ、稚拙な文章や同人間の生々しいやりとりを垣間見せてくれるメディアである。特に、回覧中に付される批評からは、会員の文章に関する意識が決して一様ではないことがうかがえると共に、文章回覧誌が余白の批評による対話や議論の場であることがわかる。投稿雑誌の添削を中心とした垂直な関係に比べ、文章回覧誌は対等な仲間内の水平的な連帯関係に基づいている。

対象とした福島県喜多方地方の「作文会」「文学研究会」は高等小学校を卒業した後、地域に滞留しながら教員・役場・農業に従事する者が多かった。しかし、それらは仮の身分であり、彼らは異なるライフコースの選択の可能性を多分に秘めた可能態であった。その動態をとらえるためにここでは学歴や職能による会員やテキストの分節化とは異なる分析モデルとして、複数の「志向」が回覧誌・会員・テキストに混在しているという見方を採用した。「志向」とは立場や行為を規定する特定の傾向である。複数の「志向」が回覧誌・会員・テキストの中に折りたたまれており、条件によって前景化されたり統合されたり併置されたりする。回覧誌のみならず、会員個人や、テキストの内部にもそのような「志向」の複数性がある。「作文会」「文学研究会」については、起源にさかのぼって字義を解釈する「訓詁」の志向と、良心に基づいた行動を重視する「実践」の志向に着目して分析を試みた。

「作文会」「文学研究会」は教員を中心に「訓詁」の志向が強かった。これは本来水平的な回覧誌の会員の間、文化資本の格差による教える側と教わる側の垂直の関係を生み出した。その文化資本の差異は和歌をはじめとした地域の名望家層の教養にふれる機会と、図書購入に拠っていた。文章回覧誌は図書の貸借の情報を流す場であると同時に、手持ちの古典文を筆写により共有する場でもあった。「訓詁」の志向を強く持った菊池研介は、国文の研究と書物の蒐集を行っていたが、教員を退職し郷土史家になった。地方で「訓詁」志向を持った者が地域の文献を渉猟して郷土史家や民俗学徒になる例は全国的に広がっており、近代において地域の教養を支え続けた。

「実践」の志向は他者への働きかけを前提とするため、垂直、水平いずれの関係性にコ

ミットするかによってその「文学」のありようも変わってくる。宇津木忠次郎は教化という垂直の関係性を重視した。地方に滞留する青年に対して農本主義的な立場から呼びかけの文を書き、また「美文」・和歌・寓話など多彩なジャンルを駆使して青年の教化を図った。

一方、宇津木忠介は出郷して関西学院に在学し、くだけた書き流しの文章で親しみを演出すると同時に、議論を行う平等で水平的な場を文章回覧誌に求めた。青年同士の連帯を演出するこのような言説は、しかし都市と地方の格差に直面する会員には受け入れられず、格差を無化することはできなかった。

「訓話」「実践」の間で揺れ動きつつ、内省的に自己を語る自己語りの「文学」も書かれた。風間悌三は和歌・新体詩・「美文」・小説などで伝統的な美的モデルや既存の物語の作中人物に自己仮託しながら、「自己語り」を行っていた。ここには自然主義流のありのままの自己とは異なる、「自己語り」の形式があった。

一方でこのような虚構に仮託した「自己語り」は互いに見知った関係の中で回覧され、時に会員の集まりの中で音読されるものでもあった。「自己語り」は共感や同情だけではなく、冷やかしや批判の対象にもなった。投稿者同士が文章を介してのみ交流する中央の投稿雑誌では容易に共感の共同体が起ち上がるが、回覧誌ではより複雑な反応が生成された。

回覧誌の会員が持つ複数の「志向」は文章回覧誌を議論の空間にした。余白を用いた言葉の応酬の中で、自己の立場を使い分け、複数の「志向」を抱える者もいた。

本研究によって、一九〇〇年代の地方青年の中にある複数の「志向」とそれにとまなう多様な「文学」をとらえることができた。ここには田山花袋が描くようなロマン主義から自然主義へという文学史の領域を超えた「文学」の広がりがあった。